

# 海外食料需給レポート

(2019年9月)

令和元年10月3日

**農林水産省**

# 海外食料需給レポートについて

## 1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(米、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

## 2 対象者

このレポートは、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

## 3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

## 4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

## 5 本レポートに記載のない情報は以下を参照願います。

### (1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

### (2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

### (3) その他海外の機関 (英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関 (FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会 (IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構 (OECD) (農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム (AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省 (USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社 (CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省 (AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局 (ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

# 目 次

## 概要編

I	2019年9月の主な動き	1
II	2019年9月の穀物等の国際価格の動向	2
II	2019/20年度の穀物需給（予測）のポイント	2
III	2019/20年度の油糧種子需給（予測）のポイント	2
V	今月の注目情報	
	豪州の小麦生産と東南アジア向け輸出	3
(資料)		
1	穀物等の国際価格の動向	6
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	7
3	平成31年3月以降の食品小売価格の動向	8

## 品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
2	とうもろこし	7
3	米	11
II	油糧種子	
	大豆	15

## 【利用上の注意】

## (概要編)

## I 2019年9月の主な動き

### 1 収穫遅れの米国のとうもろこし・大豆

米国のとうもろこしは、3月以降の降雨過多の影響で作付、生育が遅れたため、9月以降、成熟期を迎えているものの、収穫開始が平年より遅れている。

なお、9月の米国農務省（USDA）のレポートによれば、とうもろこし、大豆とも単収が引き下げられたことから、生産見通しが下方修正された。現地の見方では、今回のUSDAの予測値は、客観的な現地調査に基づき概ね妥当であるとの意見が多いが、さらに、収穫の遅れにより10月後半から早霜の影響を懸念する声もある。

写真 米国中西部インディアナ州のとうもろこし  
収穫風景（収穫可能な圃場はわずか）  
（9月19日撮影）



### 2 豪州の小麦の生産動向

豪州 ABARES（農業資源経済科学局）の「Australian Crop Report」（2019.9.10）によれば、2019/20年度の小麦については、豪州全体では、過去10年平均（24.5百万トン）を下回るものの、東部が干ばつで減産となった前年度より増産となり、19.1百万トンとなる見通し。なお、我が国がうどん用小麦を輸入しているウェスタンオーストラリア州では、豊作であった前年度よりは減産となるものの、平年並の8百万トンの生産見通し。

### 3 ロシア、ウクライナの生産動向

ロシアでは、夏季の高温乾燥の影響はあったものの、小麦の生産量は前年度を上回り、輸出量も世界第1位の座を維持する見通し。また、とうもろこしも前年度より生産量が増加する見通し。

一方、ウクライナでは、とうもろこしの生産量が史上最高の見通しとなり、米国に次ぐ輸出国第2位の座をブラジル、アルゼンチンと争っている。また、小麦についても前年度より増産となる見通し。

ロシア、ウクライナは、穀物の増産により、従来の中近東、北アフリカに加え、東南アジア等新規市場で輸出シェアを伸ばしている。



写真 収穫を待つロシアのとうもろこし  
（9月10日撮影）

## II 2019年9月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、8月下旬、170ドル/トン台前後で推移。9月上旬、とうもろこしの価格下落につれ160ドル/トン台半ばに値を下げたものの、中旬以降、豪州産小麦の生産見通しの下方修正や、米国産小麦の輸出が好調であったこと等から上昇し、9月下旬現在、170ドル/トン後半で推移。

とうもろこしは、8月下旬、140ドル/トン台前半で推移。9月上旬、米国の良好な天候予測から下落し、130ドル/トン台半ばまで下落するが、米国農務省需給報告で、米国産とうもろこしの生産見通しが下方修正されたこと等から上昇し、9月下旬現在、140ドル/トン台後半で推移。

米は、8月下旬、440ドル/トン台半ばで推移。タイ産米価格は、インド、ベトナム産米に比べ割高なため、特にアフリカ諸国からの輸入需要に乏しく、バーツ高が下支えし、ほぼ横ばいで推移し、9月下旬現在、440ドル/トン台前半で推移。

大豆は、8月下旬、310ドル/トン台半ばで推移。9月上旬、米中通商摩擦が不透明であることや、米国の良好な天候予測から310ドル/トン台前半まで下落したものの、米国農務省需給報告で、米国産大豆の生産見通しが下方修正されたこと等から上昇し、9月下旬現在、320ドル/トン台後半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

## III 2019/20年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から8.6百万トン下方修正され26.6億トン。消費量は、前月より4.4百万トン下方修正され26.7億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前月からほぼ変わらず29.8%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前月と比較して、小麦、とうもろこし、米で下方修正。穀物全体では下方修正され26.6億トンの見込み。

消費量は、前月と比較して、小麦、とうもろこし、米で下方修正。穀物全体では下方修正され26.7億トンの見込み。

貿易量は、小麦、とうもろこし、米で下方修正され、4.3億トンの見込み。

期末在庫量は、8.0億トンと前月よりわずかに上方修正され、期末在庫率はほぼ変わらず。

(注：数値は9月の米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

## IV 2019/20年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前月から下方修正され5.8億トン。消費量は前月から下方修正され5.9億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前月から下方修正され、19.3%となる見込み。

(注：数値は9月の米国農務省「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

## V 今月の注目情報:豪州の小麦生産と東南アジア向け輸出

豪州は、2018/19年度、東部の干ばつから小麦の生産量、輸出量が大きく減少し、東南アジア等の輸出市場をロシア、ウクライナ等に奪われた。一方、2019/20年度は、南東部を中心に降雨に恵まれ、小麦の生産量は、過去10年平均を下回るものの、前年度を上回る見通し。豪州の最近の小麦生産と東南アジア向けの輸出動向をまとめた。

### 1 豪州の小麦の生産動向

#### (1) 2018/19年度

ABARES(豪州農業資源経済科学局)の「Australian Crop Report」(2019.9.10)では、2018/19年度は、我が国向けのうどん用小麦の主産地の豪州西部のウェスタンオーストラリア(WA)州では、降雨が潤沢にあり豊作となったが、東部で干ばつの影響を受け、ニューサウスウェールズ(NSW)州を中心に大幅減産となった。

従って、豪州全体の小麦の生産量も17.3百万トンと、2017/18年度(20.9百万トン)より減少することとなった。

輸出量については、減産に伴う輸出価格の高騰から減少し、従来の輸出市場であった東南アジアは、安価な小麦を輸出するロシアやウクライナ等に奪われることとなった。

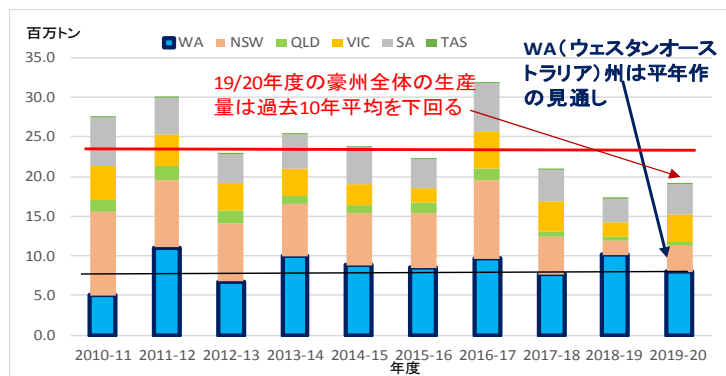
#### (2) 2019/20年度

2019/20年度は、ABARESによれば、ウェスタンオーストラリア州では、豊作であった前年度(10.2百万トン)には及ばないものの、生育期に適時な降雨があったことから、生産量は8.1百万トンが見込まれている。また、南東部のサウスオーストラリア(SA)州、ビクトリア(VIC)州が降雨に恵まれ増産となった。なお、ニューサウスウェールズ州、クイーンズランド(QLD)州は前年度よりは増産となるものの、降雨不足で生産動向については懸念が生じている。この結果、豪州全体の小麦生産量は19.1百万トンと前年度より増産となるものの、過去10年平均(24.5百万トン)より22%下回っている。

写真1:豪州 NSW州の小麦の圃場(8月21日撮影)



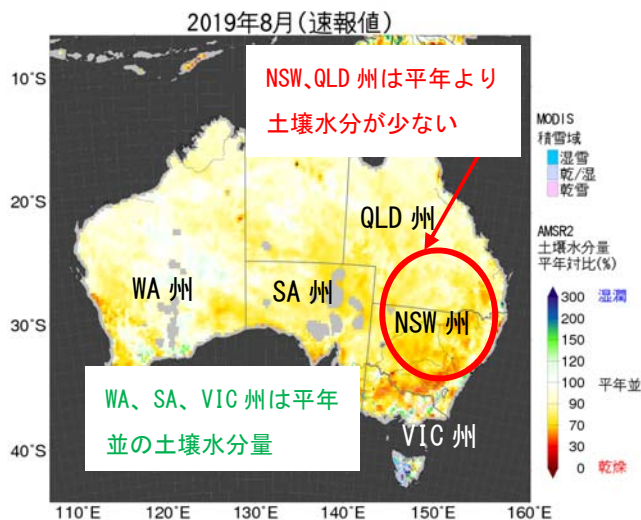
図1:豪州の州別の小麦の生産量の推移



出典:ABARES「Australian Crop Report」(2019.9.10)を農林水産省にて加工

注:NSW:ニューサウスウェールズ、QLD:クイーンズランド、VIC:ビクトリア、SA:サウスオーストラリア、TA:タスマニア

図2:豪州の8月の土壌水分の平年対比



出典 JAXA JASMAI データ

輸出量に関しては、USDA の 9 月データによれば、10.5 百万トンと干ばつ被害の大きかった前年度(9.0 百万トン)よりは増加すると見込まれている。

## 2 東南アジアの小麦輸入に占める豪州のシェア

### (1) 小麦輸入量の推移

東南アジアでは、近年、所得の増加に伴い、食生活の洋風化、多様化がみられることから、パン用をはじめとする食用や畜産向けの飼料用小麦の需要量は年々増加している。特に、東南アジアは、高温多湿といった気候の制約から小麦の栽培に向かないため、需要量のほとんどを輸入に依存している。

USDA の 9 月データによれば、2019/20 年度においては、東南アジアの小麦輸入は、28.0 百万トン（我が国の輸入量 5.9 百万トンの 4 倍以上）で、世界地域別の小麦輸入量では、従来からエジプトを始め小麦輸入の多かった北アフリカ（輸入量 27.4 百万トン、シェア 15.5%）を抜き世界第 1 位（輸入シェア 15.9%）となる見通しである。

※USDA によれば、「東南アジア」は、小麦輸入の多い順に、インドネシア、フィリピン、ベトナム、タイ、マレーシア、ミャンマー、シンガポール、ラオス、カンボジア、ブルネイの計 10 か国を指す。

### (2) 国別輸入先

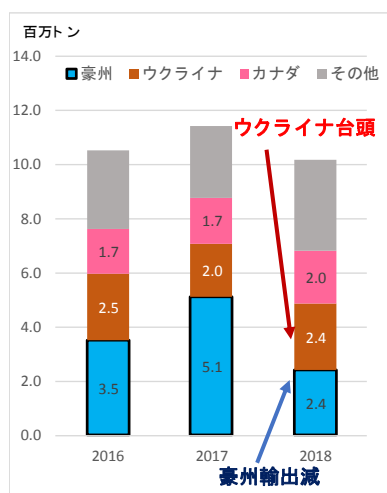
国別輸入先は、従来から地理的に近い豪州からの輸入が多くを占めていた。しかし、上記の 2018/19 年度の豪州の干ばつにより豪州産小麦の輸出価格が上昇したため、飼料向け需要を中心に、2018 年以降、比較的安価な旧ソ連諸国(ウクライナ、ロシア産)小麦に切り替えた。

東南アジアで小麦輸入量が最も多いインドネシアでは、近年は 10.0 百万トンを越える小麦を輸入しており、世界的にもエジプトに次ぐ小麦輸入国となっている。輸入先については、2017 年までは地域的に近い豪州産が第 1 位の輸入先であったが、2018 年は僅差でウクライナが豪州を抜き首位となった。

また、東南アジアで小麦輸入量第 2 位のフィリピンでは、食の西洋化により小麦製品に需要がシフトし、小麦輸入量が大幅に増加している。輸入先については、2018 年は、ウクライナが豪州を抜き、米国に次ぐ輸入先の第 2 位に浮上した。

図 3：インドネシアの過去 3 年間の小麦輸入量の推移

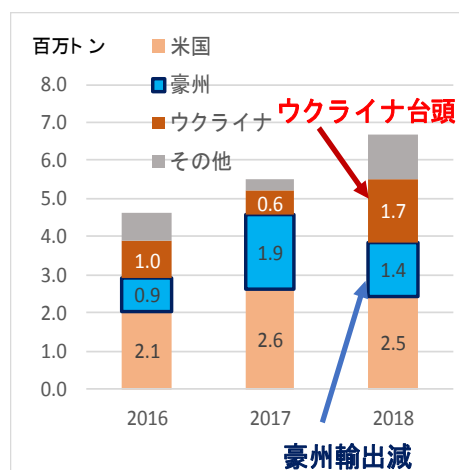
豪州に替わり、ウクライナの台頭が目立つ。



出典：インドネシア統計情報サイト

図 4：フィリピンの過去 3 年間の小麦輸入量の推移

豪州に替わり、ウクライナの台頭が目立つ。



出典：UN Comtrade



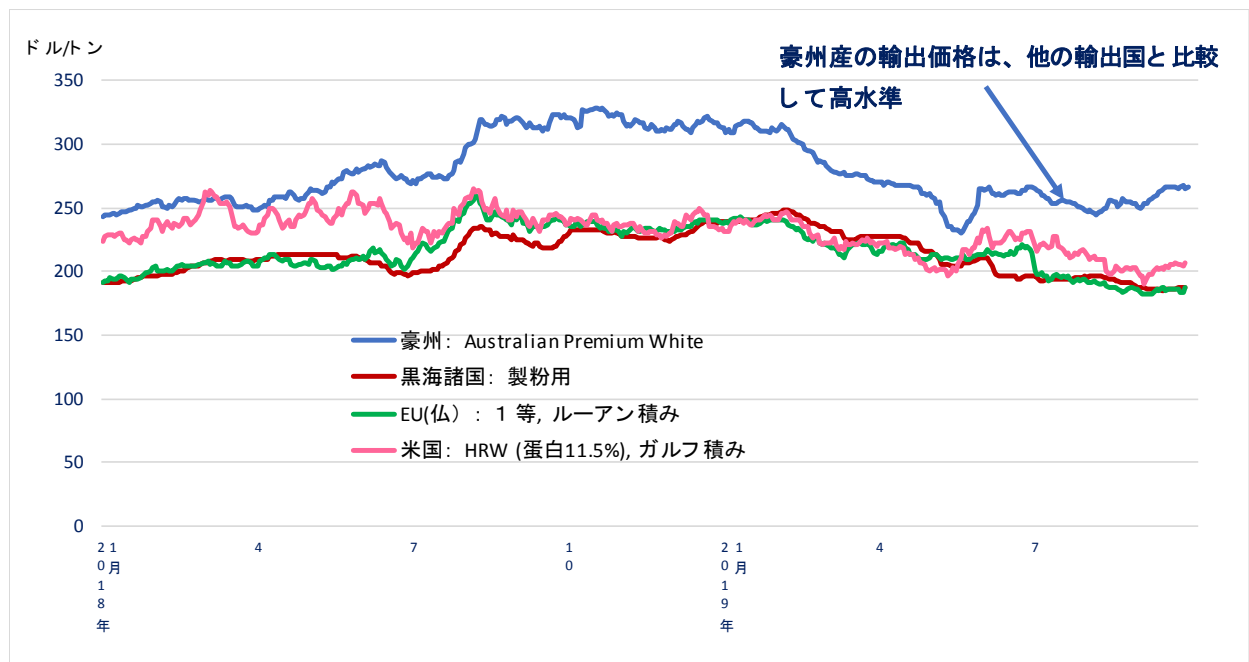
### 3 今後の動向

2019/20 年度に関しては、豪州の小麦生産量は、前年度より増加する見通しであるが、過去 10 年平均と比較して低水準であり、依然として 2019 年の豪州産小麦の輸出価格は、米国や EU、黒海諸国（ウクライナ、ロシア等）と比較して高い水準で推移している。

東南アジア諸国の製粉メーカーは原料価格に敏感と言われており、豪州が失ったシェアを取り戻すには輸出価格の引き下げが必要となるとみられる。

我が国も主にうどん用小麦を豪州から輸入しており、豪州産小麦の輸出価格や輸出数量、輸出先等を含む輸出動向については、注視が必要である。

図 5 : 2018 年以降の主要小麦輸出国の FOB 価格の推移



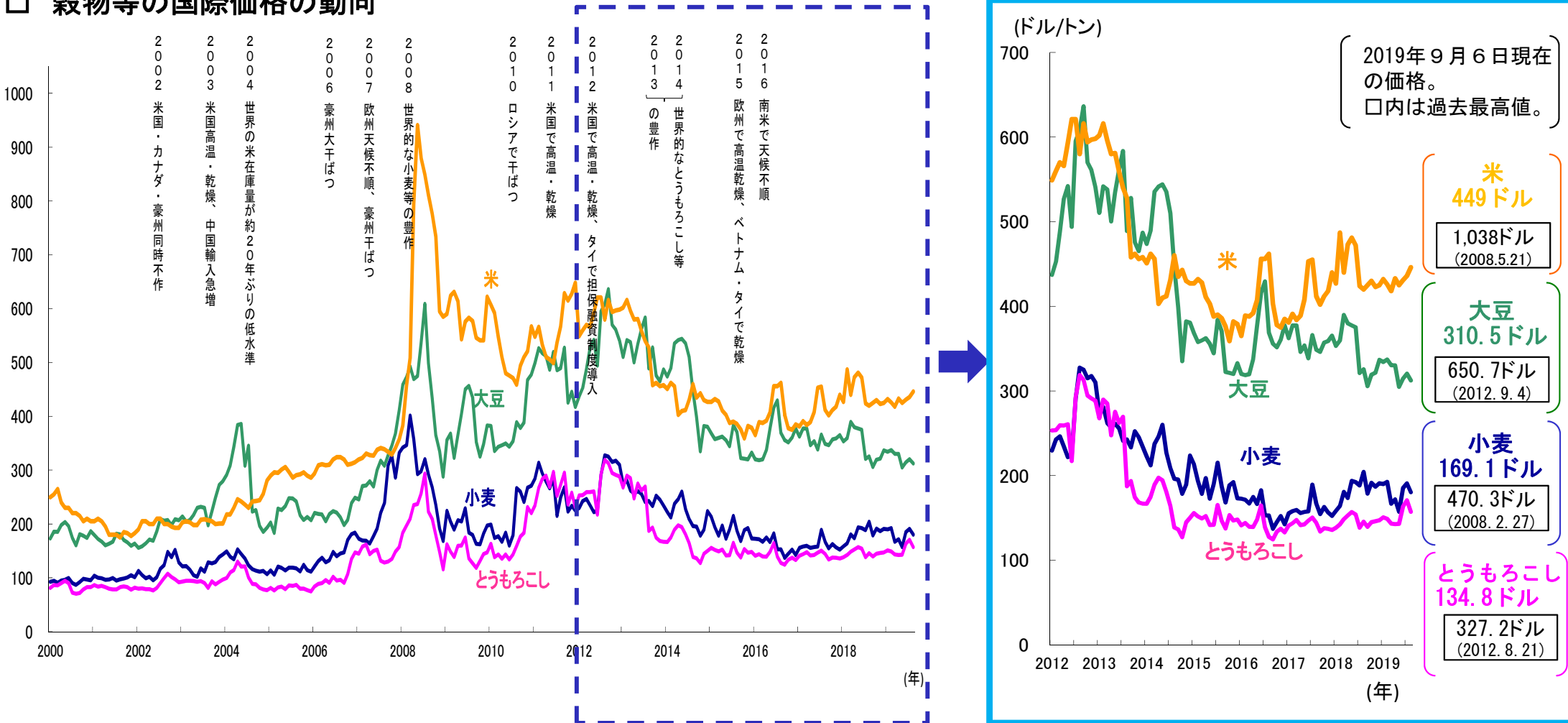
出典：IGC 資料を農林水産省にて加工

# 資料 1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこし、大豆の豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降横ばいで推移。米は、2013年以降、タイの在庫放出等から低下したが、2017年以降上昇傾向。

○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により2008年以前を上回る水準で推移している。

## □ 穀物等の国際価格の動向



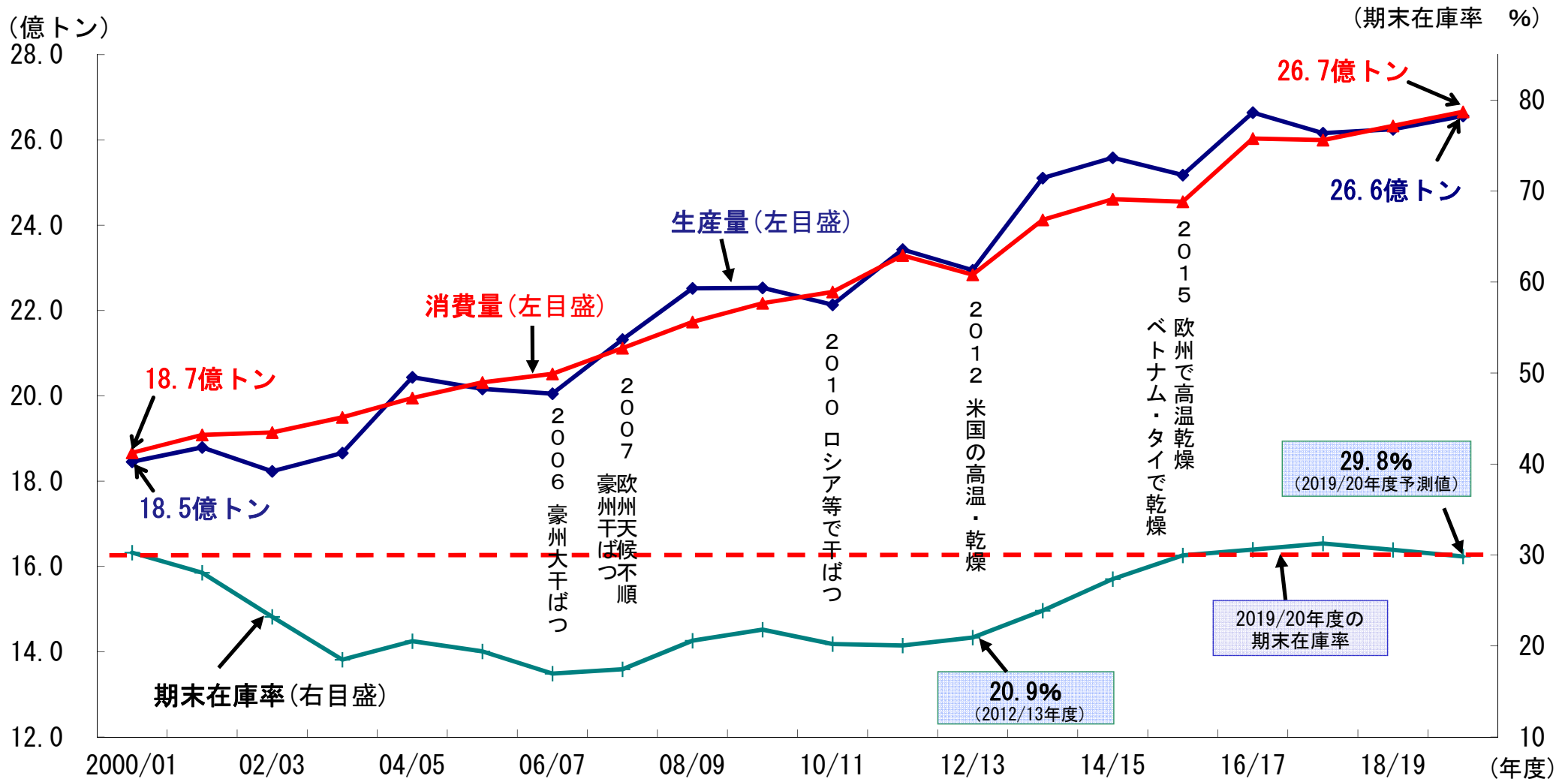
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

## 資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2019/20年度は、2000/01年度に比べ1.4倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2019/20年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、29.8%となるものの、直近の価格高騰年の2012/13年度(20.9%)を上回る見込み。

### □ 穀物(米、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(September 2019)、「PS&D」

(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。- 7 -

# 資料3 平成31年3月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

## 平成31年3月～令和元年8月の食品小売価格の動向

消費者物価指数(総務省)												
品目	H26	H27	H28	H29	H30	H31		R元				上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	3月	4月	5月	6月	7月	8月	
生鮮食品を 除く総合	97.7	100.0	99.7	100.2	101.0	101.5	101.8	101.8	101.6	101.5	101.7	0.5%
食パン	98.5	100.0	101.1	100.9	101.4	102.4	102.0	102.3	102.3	102.6	102.2	0.7%
即席めん	94.2	100.0	100.0	99.5	99.0	99.0	98.9	98.8	103.5	104.9	105.0	6.4%
豆腐	98.0	100.0	100.0	100.5	100.7	101.0	100.6	100.9	101.3	101.1	101.0	0.3%
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	97.8	94.5	93.3	92.6	93.4	93.0	92.4	93.3	92.1	-0.3%
みそ	100.6	100.0	99.4	99.1	99.6	100.9	101.5	101.9	101.6	101.4	101.3	1.7%
チーズ	97.9	100.0	99.3	98.8	102.6	102.6	103.8	100.9	100.5	103.3	103.8	-1.7%
バター	95.0	100.0	101.5	101.7	102.0	102.3	102.5	102.1	102.3	102.6	102.5	0.4%
マヨネーズ	103.5	100.0	98.1	96.7	95.3	94.9	96.5	95.4	95.9	95.2	94.1	-0.5%

資料:総務省消費者物価指数

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

## 【参考】平成31年4月～令和元年9月の食品小売価格の動向

食品価格動向調査(農林水産省)														
品目	H26	H27	H28	H29	H30	H31	R元					上昇率 (前年 同月比)	上昇率 (前年 同月比)	
	平均	平均	平均	平均	平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月			
食パン	97.7	100.0	100.9	99.5	99.8	103.4	104.0	103.0	102.7	103.2	102.1	-1.1%	—	
即席めん	93.3	100.0	99.8	99.6	99.5	101.3	101.3	106.5	107.9	108.5	108.5	0.0%	—	
豆腐	100.3	100.0	96.9	95.6	95.0	95.5	96.7	96.3	96.3	95.1	95.5	0.4%	—	
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	96.3	94.6	94.6	101.7	101.1	99.9	101.4	99.2	99.9	0.7%	—	
みそ	99.0	100.0	99.8	101.6	106.8	111.5	110.8	110.8	110.3	110.6	111.0	0.4%	—	
チーズ	97.1	100.0	100.0	99.7	103.2	107.4	101.7	99.6	105.8	105.8	107.4	1.5%	—	
バター	94.6	100.0	101.3	102.0	102.3	102.5	103.0	103.0	102.7	102.7	102.7	0.0%	—	
マヨネーズ	101.6	100.0	99.2	98.4	97.2	102.8	101.4	103.1	102.1	101.4	103.1	1.7%	—	

資料:農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

注2:調査は原則、各都道府県10店舗で週1回実施。ただし、平成30年10月以降は月1回実施。

注3:調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4:平成30年9月までの調査結果と10月以降の調査結果は、特売品の価格の調査方法が異なることから  
接続しないので、上昇率(前年同月比)は算出していません。